

実践力のある保育者の育成における短期大学の役割Ⅱ

—インタビュー結果の分析から—

前 徳 明 子・高 橋 美 枝

The Role of Junior College for Bringing up to a Practical Nursery Teacher and a Practical Kindergarten Teacher II : A Study of Teachers' protocols at Interviews

MAETOKU Akiko, TAKAHASHI Mie

キーワード：実践力、幼稚園教諭・保育士・保育教諭育成、半構造化面接

はじめに

乳幼児期の保育・教育は、生涯にわたる人格形成の基礎を培うものであり、それを担う保育者の役割は増々重要になってきている。養成校は質の高い保育者の育成を社会より要請されており、幼稚園教諭免許状の取得のための教職課程、保育士養成課程共に、大きな改正が予定されている。

中央教育審議会答申「これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について～学び合い、高め合う教員育成コミュニティの構築に向けて～」¹⁾において、これからの時代の教員に求められる資質能力として、(1) 教員として不易とされる資質能力、(2) 新たな課題に対応できる力、(3) 組織的・協働的に諸問題を解決する力の3つの視点が明らかにされ、教員の養成・採用・研修を通じた取り組みが提案されている。この答申を受け、平成28年11月に「教育職員免許法施行規則」の一部改正が行われ、平成31年4月1日より新教職課程がスタートする。

また、保育士養成課程については、保育を取り巻く社会情勢が変化する中、保育所保育指針（平成29年3月31日厚生労働省告示第117号）が平成30年4月1日から適用され、「保育士養成課程

等検討会」において「保育士養成課程等の見直しについて（検討の整理）」²⁾（平成29年12月4日保育士養成課程等検討会）が取りまとめられた。平成30年4月1日付けで「児童福祉法施行規則及び厚生労働省関係国家戦略特別区域法施行規則の一部を改正する省令」（平成30年厚生労働省令第64号）及び「児童福祉法施行規則第6条の2第1項第3号の指定保育士養成施設の修業教科目及び単位数並びに履修方法の一部を改正する件」（平成30年厚生労働省告示第216号）が公布され、改正告示は平成31年4月1日より適用されることになり、保育士課程についても平成31年4月1日より新保育士課程がスタートする。

前徳明子・高橋美枝（2018）³⁾ は実践力のある保育者の育成において必要とされる能力、資質とその育成における短期大学の役割について、学士課程教育に求められる諸能力と保育士にふさわしい資質、能力を統合的に概観することから検討した。「教職課程・保育士課程に求められる学士力」、「保育者としての専門的資質、能力」、「保育者としての人間力」は互いに重なり合っている部分を含んでおり、この3つが合わさったものが保育者に求められる資質、能力になることを明らかにした。

さらに、保育者としての実践力は、卒業後に保育、幼児教育の現場に出てから、実践や研修の中で磨かれていく。現職の保育者に、保育、幼児教

育の中で必要とされる保育者としての実践力及び新任保育者に期待される実践力や保育者としての成長について調査を行うことで、保育者養成校の役割を検討することの意義は大きい。

目的

保育者に必要な資質、保育者としての成長のプロセスを保育者自身に調査を行うことにより、実践力のある保育者に必要とされる能力、資質とその育成プロセス及び短期大学の役割を明らかにすることを本研究の目的とする。

方法

1. 調査対象

幼稚園に勤務する幼稚園教諭、保育所に勤務する保育士、幼保連携型認定こども園に勤務する保育教諭、保育所以外の福祉施設に勤務する保育士にインタビューへの協力を要請した。研究協力についての承諾の得られた幼稚園教諭7名、保育士（保育所）6名、保育士（施設）6名、合計19名を調査対象とした。幼保連携型認定こども園勤務の保育教諭は調査対象とする協力者が得られなかった。

幼稚園教諭7名は20代～60代と広い年齢層であり、勤務年数10年以上が5名、4～9年が1名、1～3年が1名で構成されていた。保育士（保育所）6名は、20代～40代の年齢構成で、勤務年数10年以上が3名、4～9年が2名、1～3年が1名であった。保育士（施設）6名は20代～50代の年齢構成で、勤務年数10年以上が3名、4～9年が2名、1～3年が1名であった。

2. 調査方法

調査は調査者1名と調査対象者1名による個別面接法で実施した。あらかじめ、質問内容を設定し、調査対象者に質問を行いそれに関連した話をしてもらった。調査対象者が自由に答えられるよ

う半構造化面接法により実施した。調査対象者の了解を得て、ICレコーダーを使用して録音し逐語記録を作成し検討した。ICレコーダーによる録音ができなかった1名については、詳細な筆記記録をもとに検討した。

3. 調査内容

面接は初めに各調査対象者のフェースシート項目（氏名、年齢、現在の職業、現職での立場、保育士や幼稚園教諭としての勤務年数）について回答を求め、その後以下の質問をおこなった。

<質問項目>

- ①ご自身が初めて保育者になったころ、お仕事の途中で戸惑ったこと、身に付ける必要を感じられたことで、覚えていらっしゃるものがあつたら教えてください。
- ②実習生や新任の先生方と接する中で、身に付けて欲しいと感じられることにはどのようなことがありますか。勤務年数1年目の調査対象者には、実習生やボランティア学生などに接する機会はありましたか。その中で、なにか感じたことがあつたら教えてください。
- ③保育者養成校の教育の中で、学生が身に付けられるようにと要望されることをお知らせください。卒業間もない調査対象者の場合には、養成校在学中にもっと力を入れて育てていく必要があると思うことなどがあつたら教えてください。
- ④保育者として年数を重ねてできるようになること、できるようになって欲しいことにはどのようなことがありますか。
- ⑤どんな資質を持っている人に保育者になって欲しいと思いますか。
- ⑥今、あなたが考える実践力のある保育者とは、どのような保育者だと思いますか。
- ⑦インタビューを受けての感想やお気づきの点をお知らせください。

倫理的配慮

調査にあたっては、学校法人小池学園研究倫理規程に基づき、あらかじめ研究テーマ、研究調査の主旨、音声データ及び調査データの扱いや個人情報保護に関して書面で説明し、同意を得た上で調査を実施した。調査内容については、個人情報を保護するとともに、情報漏洩の防止に十分配慮し、個人が特定されることのないように配慮した。

結果

1. 回答内容の分析方法

各調査対象者のインタビューの逐語記録を熟読し、「新任時の戸惑い」「新任時に身に付ける必要を感じたこと」「実習生や新任保育者に身に付けて欲しいこと」「保育者養成校の教育への要望」「保育者としての経験による成長」「どんな資質の人に保育者になって欲しいか」「実践力のある保育者とは」「インタビューを受けての感想」について回答している箇所を抽出した。その際に、半構造化面接の特徴を考慮し、他の質問に回答している中で、前の質問に関連する内容を想起して回

答している場合があること、関連する事項を連想しての発話があることに注意して、質問項目との対応関係だけにとらわれずに、関連する回答を抽出した。回答内容を一文で一意味内容となる短文にわけ、カードを作成した。KJ法（川喜多、1967）⁴⁾を参考にカテゴリー分類を行った。カードの意味内容に着目し、類似しているカードをグループ化してカテゴリー名を付けた。さらに、カテゴリー名同士の類似性がみられるものについては、カテゴリー同士をグループ化し、これにさらにカテゴリー名を付けた。以下の本文においては、カテゴリー内に小さなカテゴリーが含まれる場合には、小カテゴリーに‘ ’の記号を付け、それ以外のカテゴリーは大カテゴリーと呼び“ ”の記号を付けて示した。

2. 新任時の戸惑い

「新任時の戸惑い」に関するカードは67枚抽出された。この67枚のカードは12種類のカテゴリーに分類することができた。

さらにこの12種類のカテゴリーのうち、「子どもとの関わりに困った」「子どもにどこまで言って、どこから考えさせるか」などから構成される‘子どもとの関わり’、「子どもの様子を伝えるときの難しさ」「保護者、家族がいろいろなことを

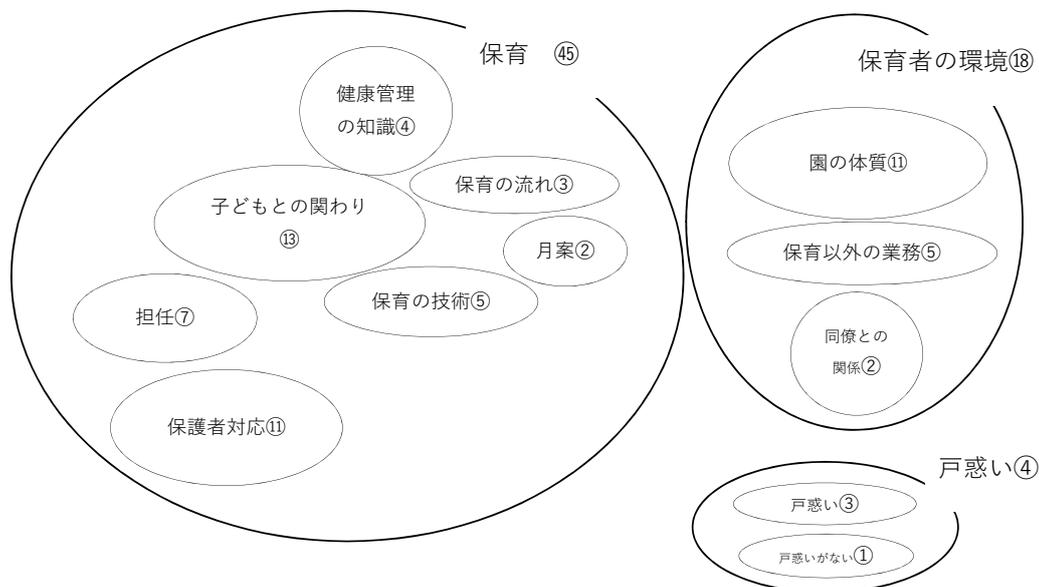


図1 「新任時の戸惑い」のカテゴリー図

求めてくる」などの‘保護者対応’、「40名を一人で担任」「クラスをどうまとめるか」などから構成される‘担任’、「ピアノ」「子どもたちや先生たち、保護者の前での手遊びなどに緊張」「子どもの前に立って話をする」などの‘保育の技術’、「嘔吐や便の処理」「感染のことに注意できなかった」などの‘健康管理の知識’、「順序とかがわからなくなって」などの‘保育の流れ’、「月案の立て方」の‘月案’の7個のカテゴリーを“保育”の大カテゴリーにまとめた。

また、「その園の決まり」「聞いてませんが通用しない」「事務の仕事だとマニュアルがあつての仕事だが、幼稚園は見て自分で感じて動いて、マニュアルがない」などから構成される‘園の体質’、「事務関係の仕事」「会議」などの‘保育以外の業務’、「私はこうした方が良いと思うが、こっちの人はこう」などの‘同僚との関係’の3個のカテゴリーを“保育者の環境”の大カテゴリーにまとめた。

さらに、「日々戸惑ってばかり」、「手探り状態」などで構成される‘戸惑い’と‘戸惑いがない’の2つのカテゴリーはまとめて“戸惑い”の大カテゴリーとした。

その構造を図に示したものが前ページの図1である。図中の○内の数字はカード数を示している。

圧倒的に、新任保育者として保育の仕事に関する未熟さから来る戸惑いを体験していることが分かる。また、園独自のルールが分からないことや、他の業界での仕事を体験している人は、マニエ

ルのない中での仕事の進め方などの園の仕事のスタイルに慣れるまでに戸惑いを体験している様子が見えてくる。

3. 新任時身に付ける必要を感じたこと

「新任時身に付ける必要を感じたこと」に関するカードは41枚抽出された。この41枚のカードは7種類のカテゴリーに分類された。

さらに、「常に状態を把握する力」「手遊び」「パネルシアター」などの‘保育の技術’、「保護者とのやり取りの文章力」「ペン習字」などの‘書く力’、「仕事をするに当たっての会話での伝え方」「保護者の立場に立って、言葉を選ぶこと」などの‘伝え方’、利用者との‘接し方’の4個のカテゴリーを“保育”の大カテゴリーにまとめた。このほかに「体調管理」、「食生活」などから構成される“自己管理”、「もっと勉強しておけば良かった」「福祉関係の授業をもっとまじめに受けておけば良かった」などの“大学での授業”そして“マナー”のカテゴリーに分類できた。

「新任時に身に付ける必要を感じたこと」に関するカテゴリーは図2のように示すことができた。

新任保育者として様々な戸惑いを体験する中で、日々の保育をおこなって行く上で必要とされる保育の技術を身に付ける必要を感じていることが分かる。また、社会人としての生活をスタートしている中で、体調管理を含めた自己管理の必要性を感じている。

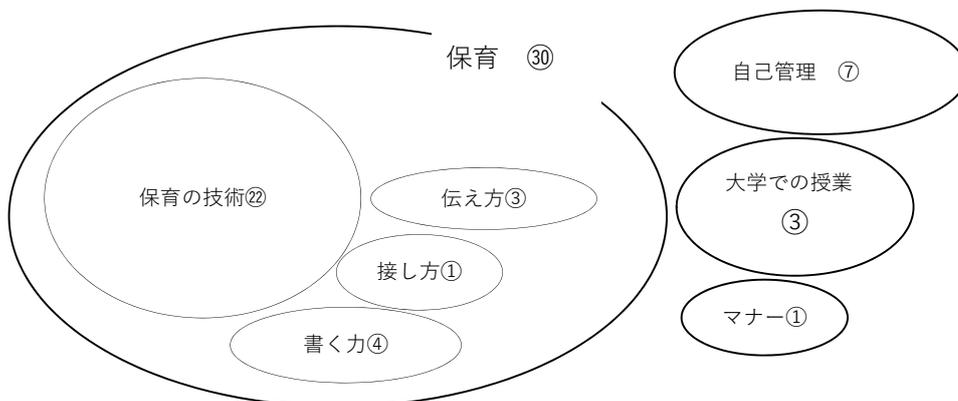


図2 「新任時身に付ける必要を感じたこと」のカテゴリー図

4. 実習生や新任に身に付けて欲しいこと

「実習生や新任に身に付けて欲しいこと」のカードは70枚抽出された。この70枚のカードは、「わからないことは何でも聞く」「やる気」「積極性」などから構成される“取り組む姿勢”、「挨拶」「時間厳守」「言葉遣い」などの“マナー”、“ねらい”“日誌”の4つのカテゴリーに分類された。

「実習生や新任に身に付けて欲しいこと」に関するカテゴリーは図3のように示すことができた。

実習生や新任保育者を受け入れる立場になったときに、身に付けて欲しいと感じることは、自分自身が新任保育者の時に、身に付ける必要があると感じたこととは回答内容が大きく異なっていた。技術的なことよりも、取り組む姿勢を重視しており、わからないことを聞くなどの行動や、積極的な取り組みがあれば、保育者として成長していくことができると先輩保育者として感じていることが明らかである。また、社会人として仕事をしていく上での基本的なマナーは、新任の保育者の基本的な素養として求められていると考えられる。

5. 養成校への要望

「養成校への要望」に関するカードは67枚抽出された。この67枚のカードは15種類のカテゴリーに分類された。

そして、「手遊びやパネルシアター」「自分の得

意とするものをもっと保育に取り入れられたら」「こういう遊具はこの位置でこのように見守る」などの‘保育の技術’、「文章力をつける」「ペン習字」などの‘書く力’、「感染症への対応の仕方」「病気についての知識」の‘病気への対応’、‘日誌、指導案’の4個のカテゴリーを“保育”の大カテゴリーにまとめた。また、「子どもたちに笑顔で接する」「生き生きと元気に」からなる‘笑顔、元気’、「自信をつけてきて欲しい」「物おじせず自信をもって取り組めた方が良い」の‘自信’‘積極性’、‘フットワーク’、‘努力’を“取り組む姿勢”の大カテゴリーにまとめた。「保護者への対応の仕方」、「言葉がけの勉強」の‘対応’、‘コミュニケーション力’、‘発信力’は“対人力”として大カテゴリーにまとめた。さらに「返事」「挨拶」「片付け」などの“マナー”のカテゴリーが分類された。“人前でできること”や養成校への要望は“ない”という調査対象者もみられた。

「養成校への要望」に関するカテゴリーは次ページの図4のように示すことができた。

この養成校への要望の内容は、「新任時身に付ける必要を感じたこと」で挙げられている“保育”に関する内容と、「実習生や新任に身に付けて欲しいこと」で回答が多かった“取り組む姿勢”や“マナー”の両方が挙げられていると言える。

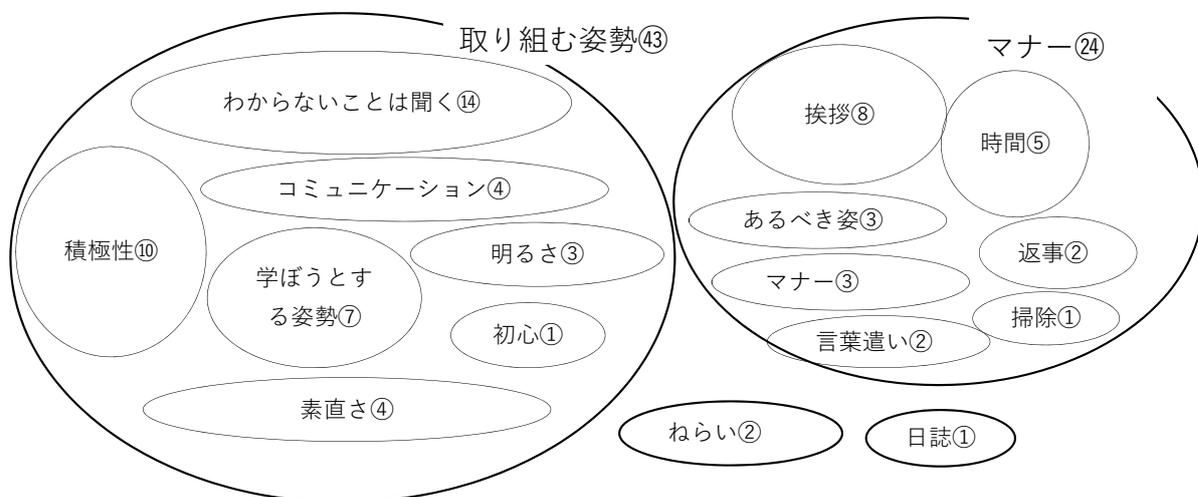


図3 「実習生や新任に身に付けて欲しいこと」のカテゴリー図

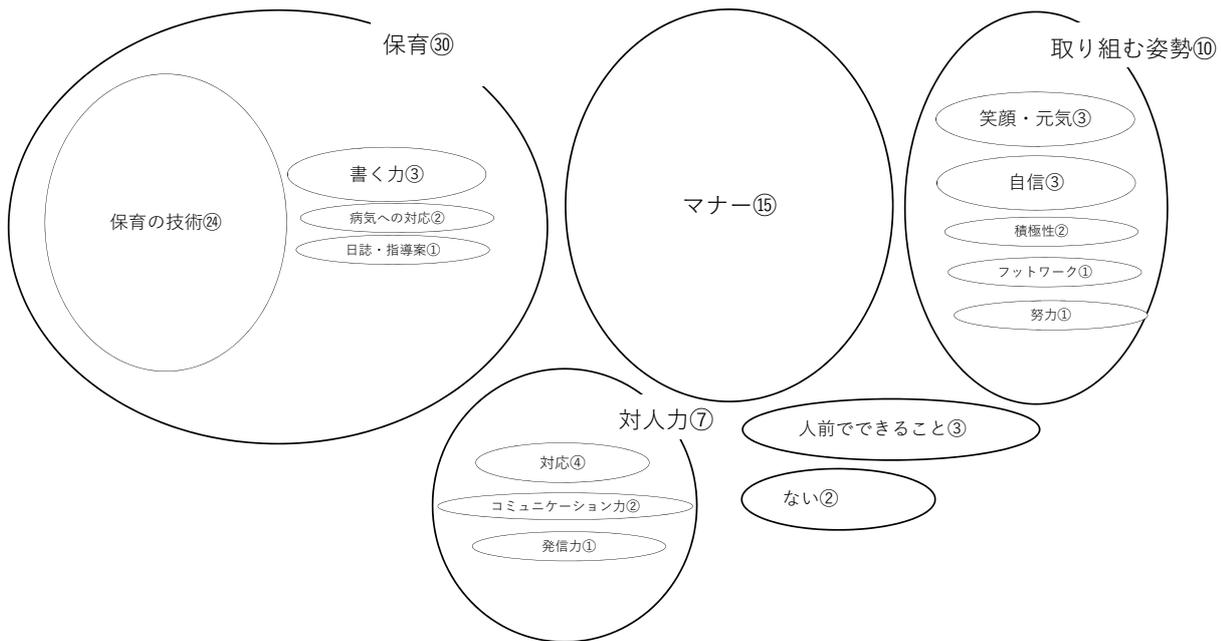


図4 「養成校への要望」の 카테고리図

6. 経験による成長

「経験による成長」に関するカードは79枚抽出された。この79枚のカードは8種類のカテゴリに分類された。

そして、「保護者対応」「あまり無理をさせてもよくないとか、子どものできる範囲が分かってくる」などの‘子ども・保護者への対応’、「クラス全体を把握しまとめる力」「製作のアイデアなども豊富に」などから構成される‘保育の技術’の2つのカテゴリをまとめて“保育”の大カテゴリにまとめた。また、「人間関係の豊かさ」「周囲に合わせて行動できるようになる」などの‘人間関係’、「自分の考えも会議で言えるようになった」などの‘意見が言える’の2つのカテゴリは“連携”の大カテゴリにまとめた。さらに、「自分のできるものの範囲とかがわかって」「責任がどういものか段々」などの“責任”、「落ち着いてまわりの状況をみられるようになった」「私生活と仕事の完全分断」などの“ゆとり、余裕”、「一年一年の保育を通じた積み重ね」などの“積み重ね”、「度胸、自信を持ってできる」などの“自信”のカテゴリが分類された。

「経験による成長」に関するカテゴリは次ページの図5のように示すことができた。

すべての質問項目のなかで、「経験による成長」についての回答から抽出されたカード枚数が最も多く、それぞれの調査対象者がエピソードを交えながら回答していた。保育者となってからの成長を実感しながら、さらに成長していこうという姿が見られた。

7. 保育者の資質

「保育士の資質」に関するカードは63枚抽出された。この63枚のカードは「心から子どもが好きの人」「子どもたちのために尽くせる人」などの“子どもが好き、大切”、「人と接するのが好き」「人間関係が築いていける」などから構成される“コミュニケーション”、「笑顔」「元気」などの“明るい”、「常に前向き」「向上心がある人」などの“向上心”、「子どもに楽しい時間が与えられる」「子どもを楽しませよう、一緒に楽しもうと思う」という“子どもを楽しく”、「柔軟性がある人」「臨機応変」などの“柔軟性”、「協調性も大切」「社会性」などの“社会性”、「子どもの気持ちになれる人」「子どもの立場に立って子どもと話ができたり一緒に遊んだり」などの“子どもの立場に立てる”、「優しい人」「思いやり」などの“優しい”、「周りが見える人」などの“周囲

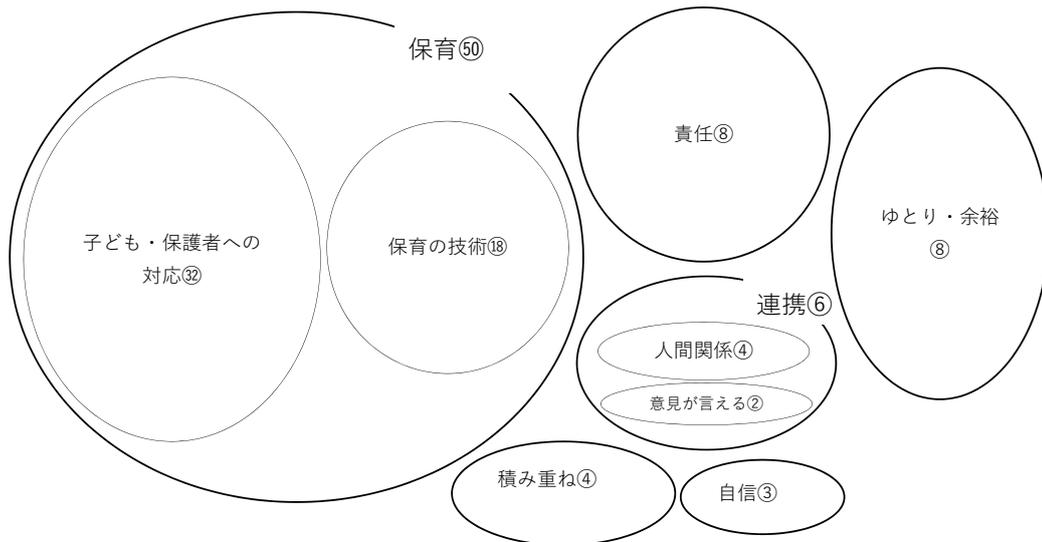


図5 「経験による成長」のカテゴリー図

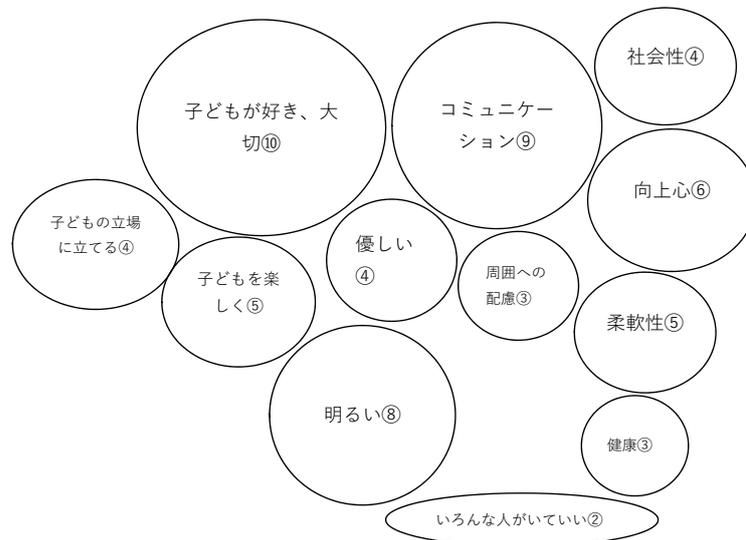


図6 「保育者の資質」のカテゴリー図

への配慮”、「生活習慣」「食事」などの“健康”、「いろんなスタイルの人がいるからいい」などの“いろんな人がいい”の全部で12個のカテゴリーに分類することができた。

「保育者の資質」に関するカテゴリーは図6のように示すことができた。

子どもたちと接する仕事であること、対人援助職であることから、子どもへの姿勢やコミュニケーションのあり方に関する回答が多くみられた。

8. 実践力のある保育者

「実践力のある保育者」に関するカードは58枚

抽出された。この58枚のカードは「やる気」「意欲がある人」「失敗を恐れず常に前向き」などから構成される“仕事への情熱、前向き”、「子どもや親から信頼される人」、「子どもたちに適切な言葉がけができる」などの“子ども・保護者との関わり、信頼”、「季節を感じさせつつ、自分の持っている引き出しを一つ一つ子どもたちに施してあげられる保育者」「見通しをもって保育ができる人」などの“保育力”、「あらゆる状況の中でも落ち着いて判断」「どのような場においても臨機応変に動けること」などの“広い視野、状況に応じた対応”、「わからないことを自分でいろいろ調べ

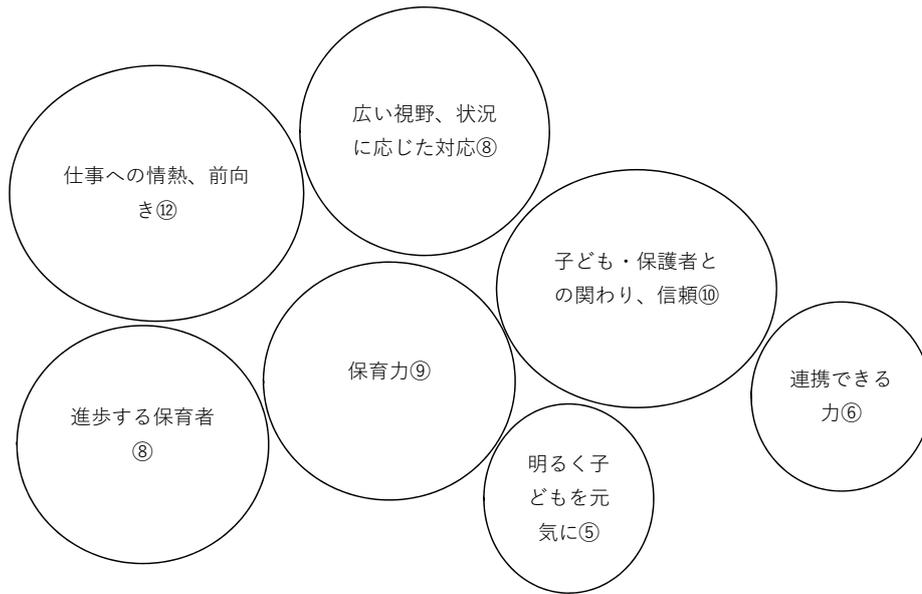


図7 「実践力のある保育者」の 카테고리一図

たり、研修を受けに行ったり、自分の知識を増やそうと進歩する保育者」「向上心がある」などからなる“進歩する保育者”、「わからなかったら聞く」「コミュニケーション力がある人」などの“連携できる力”、「子どもの前でいつも明るくニコニコ」「子どもに元気をあげる人」などの“明るく子どもを元気に”の7個のカテゴリに分類することができた。

「実践力のある保育者」に関するカテゴリは図7のように示すことができた。

「実践力のある保育者」への回答では、特定のカテゴリに回答が集中するということがなく、それぞれの調査対象者の保育者としての仕事の体験の中で、特に強く感じていることを回答していた。エピソードを交えながら、こういう時にこういうふうに見える人が「実践力のある保育者」であると思うと回答内容も具体的であった。

9. 勤務先による回答の特徴

幼稚園教諭、保育所勤務の保育士、施設勤務の保育士によって、各質問項目への回答状況に違いがあるかを、各質問について抽出したカードの枚数から比較した。幼稚園が7名、保育所勤務の保育士が6名、施設勤務の保育士が6名と人数が異なることから、一人当たりのカードの総数を人数

で割って、一人当たりのカード枚数を算出し図8を作成した。

幼稚園教諭は、保育所勤務の保育士、施設勤務の保育士と比べて、特に回答数が多い質問項目は見られなかった。「新任時、身に付ける必要を感じたこと」の回答数は、他と比べて少なかった。

保育所勤務の保育士は、「新任時の戸惑い」「養成校への要望」について、他と比べて回答数が多かった。

施設勤務の保育士は「新任時、身に付ける必要を感じたこと」「実践力のある保育者」で他と比

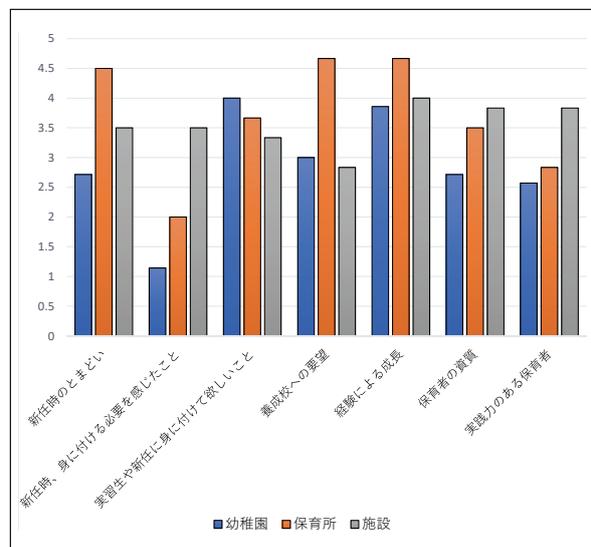


図8 勤務先による回答状況

較して回答数が多かった。

今回は面接調査であることから、勤務先ごとの調査対象者の人数が十分確保できていない。個人の特性も大きく出る可能性があるため、勤務先による特徴を調べるためには質問紙調査を実施して、調査対象者を増やしていく必要がある。

10. 勤務年数による回答の特徴

保育者としての勤務年数によって、各質問項目に対する回答状況に違いがあるかを各質問について抽出したカードの枚数から比較した。保育者としての勤務年数が10年以上の保育者をベテランとし、勤務年数4～9年の保育者を中堅とした。当初、勤務年数5年以上を中堅とすることを想定していたが、職場の状況や保育者自身の成長により、勤務年数4年目の保育士が主任級の職務を行い処遇されている場合があることが調査の中で明らかになり、4～9年の保育者を中堅として集計した。勤務年数3年以下の保育者を新任・初心とした。本調査の調査対象者のうち、ベテランが11名、中堅が5名、新任・初心が3名であった。各質問項目に対する一人当たりのカードの枚数を算出し、図9を作成した。

ベテランの保育者は、「新任時のとまどい」「養成校への要望」において、他と比べて回答数が多かった。新任・初心の保育者は、「新任時、身に付ける必要を感じたこと」「経験による成長」の

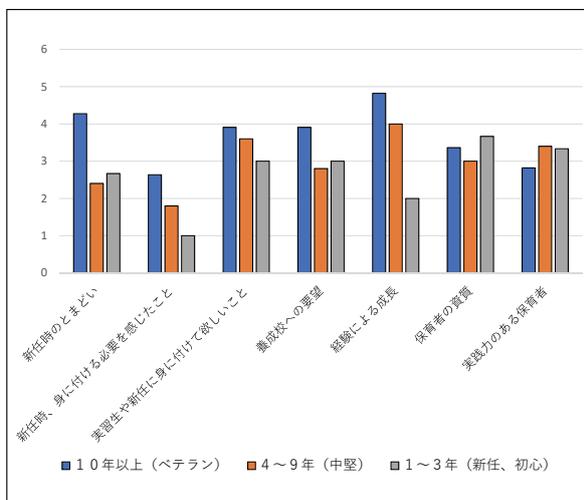


図9 勤務年数による回答状況

回答が他と比べて少なかった。ベテランの保育者の方が、体験を言語化することに慣れている可能性が考えられる。

考察

1. 新任時の戸惑い

新任保育者は、養成校を卒業して保育者としての実践現場に入ったときにさまざまな戸惑いを体験する。

森本美佐 (2013)⁵⁾ は職場定着を困難にしていると思われる理由として「卒業時と現場で求める実践能力のギャップ」を第1位に挙げている。本研究においても、新任時の戸惑いとして最も多かったのは“保育”であった。いろいろな場面で保育者としての判断や子どもたち及び保護者への対応を求められ、養成校で学んできたことと実践現場でできることに差を感じ戸惑いに結びついていることが考えられる。

また、“保育の環境”が次に挙げられた。園ごとの方針やルールについて、仕事を通じて感じ取り理解していくことが多く、学生の時のように説明されて理解するというプロセスを踏むとは限らないことも多く戸惑いとして体験されていた。職場での人間関係のあり方が良好であることが、この戸惑いを克服していく上で重要となる。

2. 新任の保育者に必要とされることと養成校への期待

本研究においては、新任の保育者に必要とされることについて、調査対象者の保育者自身の新任時の経験について回想して回答する「新任時に身に付ける必要を感じたこと」と、新任保育者を迎える立場での「実習生や新任に身に付けて欲しいこと」の2方向からのアプローチで調査を実施した。

保育者自身の新任時を振り返っての回答では、‘保育の技術’を中心とする“保育”を主として回答している。日々の保育で、子どもたちの前に立って話し、子どもたちの興味を引く工夫を行っ

て、クラスをまとめていく体験に悩みながら、養成校で習得した保育技術を頼りに実践を行っていく。なかなか思うように言葉や気持ちが伝わらない体験や、子どもたちをまとめていくことの難しさの中で、もっと保育技術が必要であると感じている。松尾寛子(2010)⁶⁾の新任保育士を対象とした質問紙調査においても、新任保育士が身に付けておくべきこととして「適切な判断力を持って、乳幼児とかかわるために必要な基礎的学力は、保育士養成時代に身に付けておかなければならない」と述べられており、新任保育者の共通した意識がうかがえる。

さらに、保育者自身の新任時を振り返っての回答では、“自己管理”も挙げられている。中平絢子ら(2013)⁷⁾では、新任・若手保育者においては「体調管理も不十分で体調不良で仕事を休むことも多い」という問題点が指摘されている。新任保育者は新しい環境に気を使い、不安を感じる事が多く、ストレスを抱えやすい状況の中、保育を行っていることも多いと推測される。日々、子どもたちと接する中で、子どもの安全を守ることをや子どもたちの成長に必要な保育を行うことの重要性に気づく中で、保育者として自分自身の体や心の健康を保っている必要を感じていると考えられる。

一方、新任保育者に接する中で、必要なことと感じる点についての回答では、“ねらい”“日誌”の回答が少数見られるものの、そのほかに‘保育の技術’や“保育”の回答が見られない。そして、“取り組む姿勢”と“マナー”に回答が集中しているという興味深い結果が得られた。

自分自身については、姿勢やマナー等がどうであったかはわかりにくく、日々の保育の中での困りごとを解決していく上で、直接的に必要な‘保育の技術’を中心とした“保育”が必要であると痛感したということが考えられる。

先輩保育者として指導する側の視点として、わからないことを聞いてきて欲しい、自分から積極的に取り組む姿勢を持ってほしいと望んでいるということが明らかになった。そのためには、関係

性を築くことが必要となり、基本的なマナーが要求されるということが出来る。前にも引用した中平絢子ら(2013)⁷⁾において、「初任・若手保育者が子どもの実態を把握できないこと、実態にあった保育の計画が立てられずに、保育が不十分になり、その結果、問題が起きたり、子どもが怪我をしたりといった不手際につながることもある。分からないことを中堅・熟練保育者に聞かず、自己判断で対応したり、初任・若手保育者同士で相談し、結論を出したりするため、良い策でないことも多く、保護者からの抗議につながることもある。」と指摘されており、自己判断をせずに質問したり、相談することの大切さがうかがえる。

さらに「養成校への要望」においては、新任の保育者に必要とされることの2つのアプローチの回答内容の両方が挙げられている。‘保育の技術’を中心とした“保育”と、“取り組む姿勢”“マナー”が挙げられている。つまり、養成校を卒業して保育、幼児教育の現場に立つときに必要とされる能力を考えていく上で、“保育”の力、“マナー”“取り組む姿勢”が重要であることがわかる。さらに、‘対応’や‘コミュニケーション’‘発信力’などの“対人力”が挙げられている。

これらは、新任保育者段階として求められる実践力であるということが出来る。

小笠原文孝(2017)⁸⁾の研究において、保育所やこども園の管理職と保育士に「養成校で身につけられる(身につけることが望まれる)『専門性』について尋ねた結果、「保育技術」、次に「発達理解、子供理解」、「指導計画・日誌の作成」と続き、そこから見えるのは、異業種の国家資格と同じように、即戦力としての能力を期待している」と述べている。まず、保育者として即戦力となるために保育技術、対人力が求められ、先輩保育士の視点で考えた時には、新任保育者を育てていくという立場から、マナーや取り組む姿勢が求められる。養成校には、新任保育者としての実践力として、保育力、対人力、取り組む姿勢、マナーなどの育成が期待されていると考えられる。

3. 保育者としての経験による成長

まず、すべての質問項目の中で、「経験による成長」の回答が最も多かったことは、保育者には幅広い力が必要とされるとともに、子どもや保護者、共に働く同僚などからの学びも多く、それらを経験したベテランの保育者には、経験を踏まえてたくさん回答できる質問項目であったということが出来る。また、質問に答えることで経験を振り返り、保育や自分自身のさらなる成長を考える時間となったとの感想を述べる調査対象者も多くいた。

その中で最も多い回答は、“保育”の大カテゴリーの中の‘子ども・保護者対応’であり、日々の保育の中で培われた子どもや保護者との関わり、関係性づくりは、経験を重ね、成功や失敗を体験する中で磨かれ、築かれるものである。‘保育技術’は、担任としての子どもや保護者から得る信頼関係の確立によりクラスのまとまりを感じることができ、行っている保育が以前よりスムーズにできるようになるという体験から、経験による成長として実感できたものと考えられる。“責任”については、保育者の仕事について、様々な経験を通して、子どもの命を預かる仕事であること、子どもたちの未来に影響を与える責任の重い仕事であることを理解し、保護者の子どもへの思いを感じることで、子どもはかけがえのない存在であることを実感することが責任への意識につながっていると考えられる。

このように、この新任保育者段階から経験を重ねて成長していく段階では、‘子ども・保護者への対応’や‘保育の技術’が大きく成長するとともに、“責任”についての意識が育っている。また、適切なコミュニケーションをとって“連携”していく力も育っていると見える。

4. 保育者の資質

「保育者の資質」については、“子どもが好き”“明るい”“子どもが楽しく”“優しい”などの子どもと接する仕事として求められる性格特性と、“コミュニケーション”“周囲への配慮”“社会性”

など、対人援助職として人と接していく上で求められる資質、“向上心”“柔軟性”などの仕事を円滑に進めるために必要な資質が挙げられていた。“子どもが好き、大切”という思いは、保育者にとっては重要である。ベテランの保育者からは「子どもが好きだけではできない」という声も聞かれるが、子どもが好きという気持ちがあるからこそ、それだけではない大変なことやつらいことなど様々なことを乗り越えていくことができるという体験も語られていた。

保育者の資質として挙げられたことがベースとなって保育者となっていくと考えられる。

5. 実践力のある保育者

「実践力のある保育者」についての回答を求めたときに、実践力のあると感じる職場の中の上司や同僚の仕事の様子を考え、また自分自身が理想とする保育者を想定して回答している調査対象者が多くみられた。回答内容は特定の資質や能力に偏っておらず、最も回答数が多かったのは“仕事への情熱、前向き”というものであった。

“仕事への情熱、前向き”“子ども・保護者との関わり、信頼”“保育力”“広い視野、状況に応じた対応”“進歩する保育者”“連携できる力”“明るく子どもを元気に”のすべてが、実践力のある保育者に求められるものであるといえる。

6. まとめ

前述の中央教育審議会答申「これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について～学び合い、高め合う教員育成コミュニティの構築に向けて～」¹⁾における教員に求められる資質、能力で、不易の資質能力として、「使命感や責任感、教育的愛情、教科や教職に関する専門的知識、実践的指導力、総合的人間力、コミュニケーション能力」が挙げられているが、本研究の「新任保育者に求められること」「養成校への期待」「保育者としての経験による成長」「保育者の資質」は答申で挙げられている不易の資質能力と重なるところが大きい。

本研究で得られた結果を総合的にまとめると図10となった。保育者の養成校としては、新任保育者の段階での実践力を確実に身に付くようことが保証できるように育成していくことが求められており、そのことが将来、実践力のある保育者となっていく基盤であると考えられる。

今後の課題

勤務先による回答の特徴と勤務年数による回答の特徴をみると、勤務先や勤務年数の要因が何らかの回答に対する影響を及ぼすことが考えられる。しかし、今回の調査においては調査対象者の人数が全体で19名と少なかったことにより、詳細な検討を行うことができなかった。質問紙調査により、定量的な検定を実施することが課題となる。

また、今回調査対象者を確保できなかった認定こども園で勤務する保育者も対象に加えていきたい。

付記

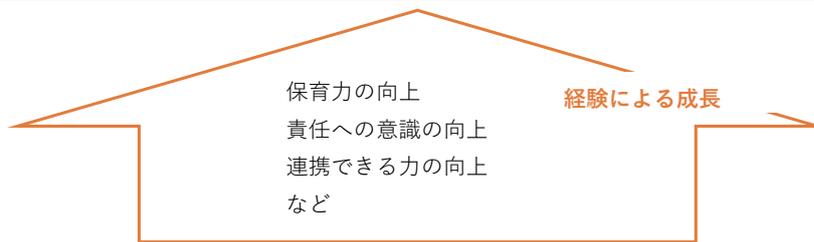
本研究にご協力いただいた保育者の皆さまに深く感謝申し上げます。

引用文献

- 1) 文部科学省 (2015) これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について～学び合い、高め合う教員育成コミュニティの構築に向けて～ (答申) 中央教育審議会
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1365665.htm (2017年11月15日閲覧)
- 2) 保育士養成課程等検討会 (2017) 保育士養成課程等の見直しについて (検討の整理)
<http://www.mhlw.go.jp/stf/shingi2/0000189068.html> (2018年5月30日閲覧)
- 3) 前徳明子・高橋美枝 (2018) 実践力のある保育者の育成における短期大学の役割, 小池学園研究紀要, 16, pp21-32.
- 4) 川喜多二郎 (1967) 『発想法』 中公新書, pp45-114.
- 5) 森本美佐・林悠子・東村知子 (2013) 新人保育者の早期離職に関する実態調査, 奈良文化女子短期大学紀要, 44, pp101-109.
- 6) 松尾寛子 (2010) 新任保育士の保育技術向上に向けての取り組みについての一考察—新任保育士からのアンケートを中心に—, 関西

実践力のある保育者

仕事への情熱、前向きな姿勢	子ども・保護者との関わり、信頼
高い保育力	進歩する保育者
連携できる力	広い視野、状況に応じた対応
	明るく子どもを元気にできる



新任保育者段階の実践力

保育力	取り組む姿勢	マナー
対人力など		

保育者の資質

子どもが好き、大切	コミュニケーション	明るい
向上心	子どもが楽しく	柔軟性など

図10 本研究による実践力のある保育者へのプロセス

福祉大学社会福祉学部研究紀要, 13, pp183-188.

- 7) 中平絢子・馬場訓子・高橋敏之(2013) 保育所保育における保育士の資質の問題点と課題, 岡山大学教師教育開発センター紀要, 3, pp52-60.
- 8) 小笠原文孝・野崎秀正・大坪祥子・崎村英樹・木本一成・崎村康史・潟山樹里・石井薫(2017) 保育現場の視点から捉えた「保育士の専門性」議論の再考, 保育科学研究, 8, pp84-92.

前徳明子 (埼玉東萌短期大学教授)

高橋美枝 (埼玉東萌短期大学教授)

